

でなくて中の亥日にせるは、その作、傾城戀物譜にも「承平二年十月中の亥の日、民間には亥の子と名付け、大内にはお支猪の御祝儀とて云云」と書いてある。大經師普賢のこの文は「亥の子」に「ちの子」(往來即ち道理をひかけたのである。

るのじ 肩にのかるもの花折りかけて、猪にのめるが寝た所(蛙合戦)「猪字」猪をいふ。猪を猪の字といふことは、ほれる(體)をほのじといふの類である。「ほのじ」を併せ見よ。果林子のこの文は、「かろるも」その條を見よと「のめる」の「め」を併せ見よ。果林子の「のめる」の「め」を併せ見よ。果林子の「のめる」の「め」を併せ見よ。

*ゐのはやた 源三位頼政とは小性立、猪俣太とは行合兄弟(雪女)「猪俣太」名を高直(或云廣直)といひ、源三位頼政の郎等である。頼政御殿の上なる欄を射落し、猪俣太これを刺殺した。

*ゐはい 忠孝にことよせて位牌知行に膝を屈むる臆病者(雪女) 白縮緬の紵帯、これも二人が申し受け、長き形見と身に附けん、我も受取る受取れと、位牌のひれに結び付け(卯月潤色)

「位牌」死者の戒名などを記した木牌。和漢三才圖會卷十九、佛供器の條に、「靈柩置釋氏戒名、安、佛齋傍、者、俗謂之位牌」。位牌知行とは、親類りの儀禮をいふ。西鶴雲、日本末代郷(貞享五年刊)卷四、祈る印の神の折敷の條に、「未末の侍親の位牌知行を取り、樂樂と其通りに世を差る事本意にあらず」。

「位牌のひれとは、俗に位牌の袖ともいひ、位牌の戒名を記してある面の兩側を少し前に折つて飾りつけたものをいふ。和漢三才圖會卷十九、佛供器の條、靈柩の條に位牌のひれある書が載せてある。「ひれ」に就いてはその條を見よ。

*ゐもり 井守といふ蟲は夫婦の契り深き蟲、女たる身は手具足に持ちれば、思ふ戀が叶うてよい殿持つと承る(三世相)昔は守官(古くは守は辨)を「ももり」といひ、守官を飾りに丹砂を以て其體の赤くなつた時、これを掲げて女の身に添り、交接のことあれはそれの塗つたが別脱するといふ。故事を、後に守官を井守(井泉池沼に棲む蟲で)と誤り、根林子の時代既に井守を靈藥に用ゐたものである。增補下學集(寛文九)氣形門に「守官。本名は蟬也。取斷蟬、飼以丹砂、體赤赤時掲之、塗守官女之臂、若有三姓犯罪血酒、故守官也。古詩曰、臂上守官何日酒、鹿鹿華落淚如雨、鹿鹿宜男叫也。齋藤彦齋撰、佛前後篇に「今世男女の中のことにつきて、水中のありて黒蟬に製するよし」とあるは蟬丸がへるなるべし。陶弘景云「蟬蟬暮蟬離蟬、以朱飼之、滿三斤、殺乾末以塗守官人身、有交接事、便脫、不爾如赤蟬、故守官守云云」。

*ゐやひごし 仲間へ入つて下されと、詞は下げてゐやひごし、いやと言はば切りかけんす氣色面に見え透りたり(博多)

*ゐらん 傾城は實物直段極まる上からは名古屋山三が妨言うても叶はぬ筈、然るゐらんに及ぶとは、

うねらもがりと覺えたり(反魂香) 娘おかめ舞與兵衛夫婦に譲り申候、外よりゐらん少しもなし(如件卯月紅葉) 「連亂」法に違ひ亂す義、轉じて苦情を陳述することをいふ。書言字彙節用集に「連亂」。ゐりよう 「月支の遺韻」を見よ。ゐらわらぢ 「いんげん」を見よ。ゐんげん 「いんげん」を見よ。*ゐんのちやう (松風)「院」木上天皇及び女院に奉仕する役人を院司といひ、その役所を院の廳といふ。

ゑ

ゑぐ 萌ゆるゑぐ摘む若菜摘む(雪女) 妻は手足も土大根、蕪ぐぐなも摘み持ちて(最明寺殿)「ゑぐな」といひ、野菜の名。和訓栞に「ゑぐ。萬葉集に蕪具と書けり、野菜の名なり、醜き哉成べし、ゑぐの若菜、ゑぐの若菜、ゑぐの若立、まに摘むなどあり、顯昭記に花はすはまに咲きて水邊に在り、芹に似たる草也といへり、今東國にてまはへといふ、上總の人はよこもいへりとぞ。俊頼はまことよめるを、仲實の返しには芹とよめり、新六帖に半夏又女萎をよめれどいふがし、今東國にて黒くゑるゑごとといふともあり。

*ゑざうし 京童の口すさみ落首浴外とりどりに、其一ふした繪草紙や、下立賣を堀河へ引廻したる角

屋敷(女腹切) サア繪草紙を、よその口の端ア餘所ごとく買求めては慰みしこの身の果を讀賣に、誰が節つけて田舎まで唄ひ流さん(川)(卯月紅葉)「繪草紙」觸賣とも讀賣とも稱した。天災地變や敵討、葛藤の類や役者評判、情死、罪人仕置など、繪畫その當時起つた世上の珍聞異事を拙劣な繪畫に描き、小刻書をした所謂瓦版印刷物で、僅一二枚の粗悪な小冊子である。これを坊間に流し歩いた者が即ち繪草紙賣である。力役働もならず、往時の華奢に引替へて見窄らしう公衆に面を曝すことも恥かしくして、深縮竝を披り二人連節に其文句を唄つて之を賣つた。彼等が全盛のその時は浮白無縁の美女を待らしたたはけの限を盡し、浮世の榮華を樂んで底抜けの大騒ぎに學習した俗謡を、今は生活難の爲に其美聲を元手に節面白う可憐得意の咽をうならせ、幾多往來の人人を面白がらしたことであらう。井原西鶴撰の好色二代男(貞享元)卷之二、大並北國落の條に、「盃屋の七條八郎お兄郎は家も實に流れて、それより松屋町とやらに引込み、夜さへ編笠を着て連節の讀賣、うはがけさかれないと聞いて來た人もあり」と見え、人倫劇蒙園叢(元祿三年刊)卷之三「論取紙賣。世上にあらゆるかはつた沙汰、人の身のの上の悪事、萬人のさし合をかへりみす、小歌につくりや瑣瑣に節つけて、つれづれして讀賣なり、愚なる男女老若の分なく、たつみあがりその者、是を買取つて樂しむとなす、誠に遊民のしわざ、無きに事かぬ商人なり」とあるも、彼等が身上的の消息を語るものである。繪草紙の賣價は享保頃一枚物で三文、上下二枚物で六文程であった。亂歴三

本質(寛保三年刊)に、「御評判の三勝心中上下六文」と見え、不審紙(寛保九年刊)に、「世に下で文にて刻運(死するものは一册が三文、上下で六文に賣渡され)」と見えてゐる。現存する繪草紙で最も古いものは、元和元年大阪畷の陣を書いた「大坂卯年圖」及び「大坂阿部の合戦之圖」である。元祿時代になつては淫美の風潮にもなつて、心中沙汰多く、好色本流行すると共に讀賣も盛んになつた。讀賣の文章も、瓦版彫刻もこれを賣歩く者も皆同であつて、文字の覺ある浪人や、放蕩に身をもちくづした食詰連のなした業であることは既に前に述べた。繪草紙の流行するにつれて弊害も生じたので、貞享元年十一月はこれを禁止する布令が出た。元祿十一年二月にも同様の布令が出てゐる。これが爲に元祿十五年頃に繪草紙の流行も頓挫したものと見え、元祿曾我物語(元祿十五年刊)に、「遊女の心中、三勝が時分は珍しきのみ狂言にも作りぬ、次第に類多くなりて、今は古めかしとて辻賣の繪草子に觀せず」と見えてゐる。寶永頃になれば更に頭を擡げ、歌祭文に移變りつつ復興の氣運に進んだ。果林子作物中にも心中二枚繪草紙(寶永三年三月上演)に、「現こそ世の上にこの男死んば風説死なぬ沙汰、生死二枚の繪草紙に懸路の回向を受けけり」と見え、今宮心中(寶永七年正月上演)に、「浪華藝者の風俗を橋名所に擬へて書集めたる漢牌草、云云」と見え、生玉心中(正徳五年八月上演)に、「我紙付けて我と我が名を流さん恥かしの、我噂も明日よりは歌祭文を身の上の云云」とある當時繪草紙の變遷を語るものである。序に一言すべきは繪草紙の語する所謂瓦版のことである。瓦版といふは粘土を平滑にしてそれに彫刻し、瓦に焼いて版にしたからの名であると言傳へであるが、實際瓦版印刷物に就いて見ると決して瓦に彫つたものと見えない、矢張り木版である。心中天網島も名残の橋づくしの條に「櫻木にほは

あじかりまた一ゑにち

りはほりて繪草紙の、版摺る紙の其中に」とあるは、繪草紙が櫻木版印刷であることを語るものである。瓦版の名は古くは見當らないで、文化頃からいはれたのであらう。其彫刻の相態 (人倫訓詁圖舞所歌)



〔繪草紙〕

さか恰も瓦に彫つたやうであるから、かくいはれれたのであらう。其相態なわけも彫刻者が素人であり、且は早く賣らうとして印刷を急いだのに歸因する。

あじかりまた 大太刀に腰がづられて歩めばあじかり又五郎、もし正眞の公時に出逢はばれち殺さるるは定のもの(弘徽殿)

坐りて兩股の左右に開くこと。開き股「あじかり」は「あじかり」の轉で、すわるの意。和訓雑すわるの條に「畿内にあきりと、開れる、長崎におさら、土州にあきりと」といふ。醒睡笑・五に、「行きななにつぼうだ花が来しなにはあじかりたりや桶とちの花。東海道名所記に「足はたれたり、あじかりまたになりて宿を通る。」「あじかり又五郎」はまたかりに衛士をいひかけ、股に又五郎をいひかけたのである。

あしやうりやうりんひのくのみま
「えしやう兩輪の火の車」を見よ。

あしんぶつ さて中尊は惠心佛(三世相)

〔惠心佛〕釋源信作の佛像をいふ。源信は比叡山惠心院に居たので惠心と云ひ、日本天台惠

心流の祖で、殊に念佛弘通の先達である。佛書に秀で、また著述にも往生要集、彌陀經疏、一乘毘勒經十種に及んでゐる。寛仁元年六月薨(七十六歳)した。

越後衆か明石か 越後衆か明石か、髪がちつくり縮んだ(丹波興作)

髪が縮んでゐるので、越後縮明石縮に縁をとつて越後衆か明石かといふのである。

越前布・越前綿 この北國にてお尋ねあらうならば越前布・越前綿、若しは實盛の生國なればお供の奴の髭に塗る油墨などのお尋ねもあるべきに(反魂香)

〔國花實盛記卷十二、越前國中名物出所の條に、牛頭布、崎布、刺綿布、……、肌綿〕と見え、近松のこの文に「實盛の生國なれば云々」とあるは、謡曲實盛にも「實盛生國は越前の者にて候しが」と見え、齋藤別當實盛が老武者として敵に侮られるを厭ひ、鬚髭に墨を塗つて節原の戦に討死した縁によつてかくいふのである。

あづあひの死骸の傍へ出ることか、あづあひ、ざりながらいやといふも仔細ら(反魂香)

解筋く(福世義であらう。氣味悪い。恐しい。怖い。但書集賢增補に「ますい」氣前にて恐怖の形状ことと云ひ、物類稱呼に「おそろし、こはしを西國にてまづいと云ふ」と見えてゐる。

越中の國の人 越中の國の人と見た、何で見たれば、この下紐を解いて一夜は泊らんせ(丹波興作)

越中(中)に紐が附いてゐるから、その縁でかくいふのである。

入り、ヤア有難い忝い(今宮) 時景親子笑壺に入り、オオでかしたでかした笑壺 願ふ所と笑壺に入り(國性爺)

あつらひよくきん 産衣に越羅蜀錦を裁(國性爺)

〔越羅蜀錦〕支那の越の國の羅、蜀の國の錦は共に名産である。杜甫の詩句に「越羅蜀錦金粟尺」。

あてんらく 越天樂の調は琴柱に落つる雁がね(三國志)

〔越天樂〕雅樂平調の曲名、琴柱に落つる雁がねとは、琴柱を十三絃に並べ立てたのは雁行に似たればかくいひ、謡曲成陽宮にもある。

あどは假の宿(卯月測色) アアさらりと穢土の苦が脱けた(寄庚申)

〔穢土〕佛のまします清淨な國土を淨土といふに對して、煩惱の業苦が滿たされてゐる濁惡なこの世を穢土といふ。現世。婆娑。

あどな 髭長なせにせせばん、もうゑどあぐな(浦島)

餌。あぐな。醒睡笑・五に「何をがな鷹のまどにせやれ」。

あなな ゑなが、ささいにまつむし(り懸)

〔糞雀〕正しくは「えなが、無靈類に屬する鳥の名。形四十雀に似て體極矮小である。

あにしなきりんなを見よ。

あにち 慧日に照す大恩教主(釋迦)

【誓日】佛陀の智慧明かなるを日に譬へていふ。法華經に、「智慧光明、如日之照」。詠曲・身延に、「有難や衆罪如雷霹靂日の光に消えて即身成佛たり」。

【ゑのころ】 「えのころ」を見よ。

【ゑはう】 この浪華津の恵方神(淀蟹)まづ恵方棚・神の棚(夕霧)。

【恵方棚】 神の棚(夕霧)の居る方(大經師)【恵方】 棚の上で大将軍(八將)の居る方を【恵方】といひ、其反對の方を明る神を【恵方神】といひ、該徳神の居る方を明の方とも【恵方神】といふ。其反對の方を明る神を【恵方神】といふ。其反對の方を明る神を【恵方神】といふ。其反對の方を明る神を【恵方神】といふ。

【日次紀事(延寶年)】 正月の條に「凡其歲吉兆方必在德此惠加嚴惠等恵方、向此方而爲事則必吉、俗以嚴爲得之字、毎少事欲得之也。同書十二月晦日の條に「陰陽家因三來威之支子、而四方問考吉兆の方、是稱得方、俗問每家向其方、高張之、是謂嚴德、凡新年出納物、飲食類必先獻之。流經出世禮に「幣串を上げ神樂を上げ、奏り納むる八幡山、この浪華津の恵方神、民安全こそめでたけれ」とあるは、八幡山が浪華津の東北にあつて、恵方に當るをいふため、寶永頃では寶永六年が己丑でそれに當る。そして寶永六年の暦は前年末に調製され、それに據つたとも考へられるので、差券流經出世禮の初上演は寶永五年末か或は六年であつたであらう。

【狩人のゑふ】 小鳥を詰むるが如く(女談扇)

【餌巻】 餌を入れる巻の義。狩人の小鳥などの獲物を入れるもので餌袋ともいふ。貞丈雜記・卷之十五に、「餌袋といへども袋にあらず、竹籠なりまぶごの事なり」。

【ゑぼし】 親左近右衛門が烏帽子子、與作といふ名を付けたれば(丹波興作) 烏帽子實の親仁様内のいまめに廻されて卯月調色) 侍は衣紋縞ひ、烏帽子のひながた引揃へ、我も我もと並居し(佐々木) 烏帽子折の上手を召し、位々の烏帽子冠をいひつければ(烏帽子折)

【烏帽子子】 上古の烏帽子は禮冠の下に被つた頭巾であつたが、延喜の頃から冠と帽と別になり、冠は正位以上用ひ、帽は平民に用ひる習となり、無位無官の者も朝方に冠を被つたのである。烏帽子も初めは黒絹で袋の如く縫うた茶かまの物であつたのを、鳥羽院の頃より剛く作られ、それより後、漆を塗り縁を附けなどすることとなり、立烏帽子、まび烏帽子、風折烏帽子、侍烏帽子、細烏帽子、烏帽子など諸種の品ができた。

【烏帽子子】 元服の時に烏帽子を被らせ名を付ける人を烏帽子親又は名付親といひ、その子を烏帽子子と云ふ。

【烏帽子親】 口寄巫女の用ひる語。頭に被つて親しむ烏帽子のやうに、親又は子として實のやうに慈愛する者をいふ。浮世床二編巻上「いとし可愛と思ひ子の烏帽子親ではなあれど、肝を離れぬ寵愛の秘蔵烏帽子が来たわいの」。

【烏帽子の雛形】 雛形の雛は烏帽子名所の中に見えない。按ずるに烏帽子の語式の意で、大小名侍など夥多の者どもが各大小諸種の烏帽子を被つて並居る有様は、宛然烏帽子の語式雛形を引揃へた如くなるによつてかく云うたのであらう。

【烏帽子折】 烏帽子を造ること、又は造る者。薩州府志卷七、土庫門下・服飾部、烏帽子の條に、「凡造烏帽子謂折、出自風折

烏帽子之詞、而風折之謂也。

【ゑぼしざくら】 烏帽子櫻の片分けて、枝を諷ふ如くなり(持統天皇)

【烏帽子櫻】 櫻の名。詠曲・烏帽子折に、「世變り時來り、折知る烏帽子櫻の花、咲かぬ頃を待ち給へ」。

【ゑま】 あれあの繪馬は澁谷の金王が長田の庄司をきめた體(兼好)

【繪馬】 神社佛前に奉納せる額をいふ。神前に繪馬を奉納するは神馬を奉納する略式である。されば馬の繪を奉るが本義であるのが轉じて、武者などの種種の繪を奉るやうになつたのである。日本書紀通記に、「神社率三神馬一懸云馬者、神之所靈祀也」と見え、また建曆年中伊豆三島の神社に八幡太郎の隱皇合戦の繪馬があつたことが舊記に見えてゐるから、遷き持てり繪馬があつたのである。兼好法師物見車に「田村丸御魂退治の繪馬」とあるは、京都清水寺にある有名な繪馬で、明暦三年に海北道暉(友進)の描いたものである。

【欲天のくわうやきなり(西王母)】 【壽】 智慧は法身の壽命なれば壽命といふ。太平記巻に、「絶えなんとする壽命をつが三と只此門に、絶え時なんべし」。壽持記下三之に「慧命調問論識、以壽爲命也」。

【ゑむしち】 それ女どももむしる薄縁敷けやとて(西王母)

【繪馬】 薩州府志(貞享三)七、土庫門に、繪馬(倭俗名謂繪馬、依有雜品之文彩也、元來自長崎港、今四條通并三條殿大和橋北端之也)。

【ゑりくりゑんじよ】 「えりくりえんじよ」を見よ。

【ゑもんほふし】 慧遠法師がその昔廬山に結ぶ交りは白き蓮の露の

【玉(佛田川)】 【慧遠法師】 晋時代、廬山東林寺の高僧である。幼にて學を好み、博く六經を綜べ、尤も老莊を善くす、二十歳出家し、羅漢安法師として大衆の畏信を博し、大元中錫を廬山東林寺に杖、遠の道譽を聞いて來り従ふ者多し、慧永・宗炳等と白蓮社を結び、無量壽佛の像を淨業を修し、卜居三十餘年、足山を出でず、客を悉くに虎溪を以て界と爲す、晋の義熙十二年(昭)年八十三。

【ゑんさう】 鐵おつ取つてゑんさうなし(兼好)

【空中繩床】 手、拂子、或は如意などをもちつて空中または地に圓圍を畫く法式で、心性の用偏平等なるを示し、本來の面目を顯はす意である。傳燈錄五に、「師見僧來、以手作三圓相云云」。この文は、鐵を以て圓圍を畫いて引道の式をなしたのである。

【ゑんしやうすげさだ】 叶はぬ時はゑん正すけさだ、あつちへ遣るか、つちへ取るか首がけの博打(反魂香)

【永昌介定】 介定は永昌の弟子である。菊本羅刀組等に、介定は永昌の弟子である。菊本羅刀組、古今萬寶全書、古今新書合類大全山城國親小鈴物系圖秘談の條に、「永昌一介定永昌が弟子」と見え、てゐる。

【ゑんせき】 「えんせき」を見よ。

【ゑんてん】 縁のふきひ蟬娟として八字の細眉ふんでんたり(実智天皇)

【ゑんてんかう】 我古のゑんてんかうが人相の祕書を授かり、普く人間一生の吉凶禍福をさすに毫釐も違はず(扇船)

【ゑんてんかう】 我古のゑんてんかうが人相の祕書を授かり、普く人間一生の吉凶禍福をさすに毫釐も違はず(扇船)

〔愛宕編〕唐太宗時代の人、人相を見てその人の運命吉凶を判断する術に長じてゐた。萬姓統譜に、「愛宕編。成都人、有風鑑。應驗不可勝紀。太宗召見曰、古有君平、朕今得爾如何、對曰彼不達、時臣固勝之、子客師亦傳其術無不三奇中。」

えんとんしくわん 一心三觀の胸の月ば圓顔止觀のそらにかか

〔圓顔止觀〕一乗教の圓融無碍見在にして化益の顯速なるを圓顔といひ、妄念を靜止して眞智の通達を止觀といひ、天台の説くところである。

えんぶ 「えんぶ」を見よ。

えんえんごくごく えんえんごくごく 無相無念の上に於て、むぼうなしの大用を起し(大原問答)

〔圓四極極〕法身報身應身を具足して圓、大圓觀智・平等性智・妙觀察智・成所作智圓妙であつて、善根を極め涅槃を極めることをいふ。

大原談義聞書鈔(延寶五年刊)に、「於三圓四極無相無念果成之上、起之無方難思之大用」。

〔我達世の昔より云云〕を見よ。

を

*を 昨日の朝山敵祐經尾越す鹿に目を付け(會稽山)

〔尾〕峰通りから麓まで長く引きはへた處をいふ。古今集卷一、春上の部の歌に、「山櫻わが見にくれば春鮮にも尾にもたちかくしつづ」。

えんとんしくわん — をこ

をかざきづきん エイソリヤひかれて來れば名も立たぬ、岡崎づきん

羅綾の袂(三國志) 〔岡崎頭巾〕遊遊笑覽卷二上、服飾部に、「をかざき頭巾。丸頭巾に綴付たるを熊坂頭巾」と云ふ、もしこれにや、短きも長きもあるべし、長きを熊坂頭巾といふ。

をがせ 戀に心をひれり麻の、ながせ亂れた胸の中(丹波興作)

〔字〕字を捻り駭いだものに綾をかけて縁とし、これを、袴置にかけて輪となせるもの。往時は字を績むを女藝の一に數へ、殊に下婢などは字を績むを内職としたのである。

*をかみ はつる二十日の月毛の胸の、尾髪亂れて置く露に、袖の涙

を打合せくどき焦れて泣く涙、馬の尾がみや浸すらん(大經師)

〔尾髪馬の尻尾。太平記卷十二公家一統政道の條に、「白瓦毛なる馬の、尾髪あくまで足つて太く浸しに、沃懸地の敷置いて」。

をかめ 甚によそへたる我身の上、包む心の奥の手はなかも見えて

哀れなり(千疋犬) 〔岡目臈目即ち側から見る目をいふ。傍觀。和訓栞に「をかめ。陸目の義、海中の事、陸より觀て計るをいふ、旁觀の意也。其義を傍觀して居れば能く其得失がわかるを感に。岡目臈目は、臈目八目といふ。〕(序云、近世江戸の内で吉原以外の遊女屋のあつた場所を岡場所と稱した。この岡も臈の義で、吉原を本場所と云ふに對しては稱せられた語であらう。

をがらづきん 芋糟頭巾つたつて大斷臈指しこばらし(持統天皇)

〔芋糟頭巾〕甜菜の芋府を組んで作つた強盜頭巾。その條を見よ。芋原頭巾。物類稱呼卷四、衣笠部、頭巾の條に、「江戸にてからせしづきん、又がんだうづきんと云ふ北國にてばうしと云ふ、又よくそづきん、よくづきんと云ふ。」

*をがんです 笑ひ顔見せて下んせ

ながんます(夕霧) 〔拜みますの訛。〕

*をきのやへぎり いせの海人にあらねども、其はま萩野八重桐を

龜井橋ちやとおしやる、心ばの、さきはおたびの神かけて後先に又

續く者がない(叔(今宮) 〔萩野八重桐〕寶永から正徳頃にかけて大阪で女形の名優である。役者謀火焚(寶永七年刊)大坂の巻、若女形の部に萩野八重桐とあつて其藝評が書いてある。堀山健(根林字作、正徳二年七月竹本座)に、「私が昔はうき河竹の傾城萩野屋の八重桐と、太夫仲間を立てて者と言はれし程の全盛の」と見えて、萩野八重桐をなく萩野八重桐になつてゐる。今宮心中(竹本座上演)のこの文は、潰散(萩野)のひびかりたのであるから、萩野八重桐でなければならぬ。按ずるに同時代に萩野八重桐とも萩野八重桐ともいふたものである。今宮心中のこの文は、龜井橋を西に渡れば天神のお旅所であつて、お旅所に行くには龜井橋より外には後先に續く橋がないを、絶世の名優である意にひかけたのである。

をぐり この將監は禁中の繪所小栗と筆の争にて、勅諭の身となつた

ので(反魂香) 〔小栗翁野元僧の初の師小栗宗丹を借りてかくいふたのであらう。宗丹名は助重、大徳寺に住し、筆を周文に學び、後に牧溪、正潤、

夏莊、馬遠の畫風を追慕し、研究してその深趣を得、寛正五年正月六十七歳で歿した。をけがはどう 具足も拙者が細工した桶が、は洞とはこれなるぞ(用明天皇)

〔桶則調具足の一種。豐臣家譜に「尾張國所用法甲冑者何哉、對曰有三角丸者、其制異於桶皮筒也。於右脇結之屋伸自由也」と見え、また本朝軍器考、頭書九下、に「桶皮筒といふは、古の桶皮筒といふかな脚に草すりを附たる也」と見えてあるから、桶皮筒も書いて、金剛の左脇腰帯にて屈伸するやうに作つたものであらう。根林字のこの文は、久馬平が桶結びであるから、その縁飾の桶側といふたのである。

をけと せんなら桶取といふ狂言は、女に出家が濡れる事ぢや(壬生大念佛)

〔桶取〕壬生寺(寶幢寺)で毎年三月十四日から二十四日まで大念佛修行の間、狂言の儀あり、これを壬生狂言といひ、番組二十五番あつて、桶取はその一である。小唄打聞(寛政二年)等を集む、壬生狂言の歌、桶とらにさうきうしる髪、したひさるへの常陸帯、結びしめたき心根を、しらす姿のナ踊りの手、ちぎりをかか桶とりよ。是は壬生狂言のうたとせん、寛政元年の春の頃京攝の間に専ら流行せしといふ、ふるき唱歌とは見え侍。

*をこ 御政道暗しとは天晴おのれは(この酒呑童子) 大王の御敵日本武尊當國に忍びある由聞召され、さしも猛威の聞えある八十の梟帥を、女に形を扮し討取る程の